

全国書写書道総合大会の統一テーマは「ふるさと」

人は誰もがふるさとを持っています。それは生まれ、あるいは育った地だけに限りません。人との交流や書物の中にもそれぞれの心のふるさとを見出す人が多いのではないのでしょうか。

ふるさとには飾らない、素のままの自分がいます。そこは人の情とやすらぎ、そして明日への希望に満ちています。3・11東日本大震災という未曾有の困難を乗り越えて2年目の今年、私たち日本人は、もう一度ふるさとを見つめなおし、復興への活力を高めなくてはなりません。そのきっかけとなるような言葉を胸に刻みたいと思います。

今回の総合大会のうち、特に学生展と硬筆コンクールについてはできるだけ「ふるさと」と関連付けた課題を選びました。文字、言葉そして文章を書き込んでいくとき、その言葉の持つ意味を心にも刻み込んでいくではありませんか。そのことが書字文化の第一歩であると考えています。

◆解説は主に指導者対象に書かれています。先生方におかれましては、児童・生徒らにもぜひとも課題の解説をしていただけますようお願い申し上げます。

◆大平恵理会長書による手本は6月はじめに書文協ホームページに発表され自由にダウンロードできます。規定用紙は購入のみです。手本、規定用紙ともに1枚10円。ただし、園・学校が団体応募される場合は、応募予定者1人につき手本1枚、規定用紙2枚が無料で提供されます（送料は申し込み団体の負担）。

ひらがな・かきかたコンクール課題

《硬筆規定》

(年中以下)	く さ	な ま え
(年長)	む か し	な ま え
(小1)	つき み だ ん ご	い ね ん な ま え

(小2)	は た を お る	つ る の	お ん が え し	二 年 名 前
(小3)	あ お ぞ ら に	ゆ び で じ を か く	あ き の く れ	三 年 名 前

江戸時代に俳句を作った小林一茶の句。俳句は。5・7・5に分けて合計17文字で書く世界一短い日本の詩の形。秋の暮れ、夕空は一層青さを増します。ふと手をのばして字を書いてみたくなるような高くて、広い空。

《毛筆規定》

園児	く
小1	く つ
小2	つ り
小3	り か

全国学生書写書道展課題

席書大会の部

- 園児 くも
- 小1 だいち
- 小2 つながる
- 小3 生まれる
- 小4 同じ思い
- 小5 秋の七草
- 小6 夢追う人
- 中1 親愛の情
- 中2 素顔の自分
- 中3 歳月の記憶
- 高校A 慈母手中線
- 高校B 赤とんぼ

【解説】

中唐の詩人、孟郊の「遊子吟」の一節。慈母（じぼ）手中線（しゅちゅうのせん）遊子（ゆうし）身上（しんじょう）の衣・・・と続く
慈しみ深い母。その手の中にある長い糸は、遠く旅立つ息子に着せるための衣服を縫っているもの。

【解説】

正岡子規の俳句。季語は赤とんぼ（秋）。筑波は茨城県の筑波山のことだと言われている。雲ひとつない秋の空と赤とんぼの対比があざやか。

高校B

赤とんぼ 筑波に雲もなかりけり

大学A 叢菊両開他日涙 孤舟一繫故園心

【解説】

中国の唐の時代の著名な詩人、杜甫の「秋興」の一節。
 叢菊(そうぎく) 両(ふた)た(た)び開く 他日の涙 孤舟 一(ひとえに)繫(つ)な(ぐ) 故園の心
 菊は「ひ」とも読む。庭の菊が今年も群れ咲いて異郷で私は涙している。川岸に舟をつないで故郷への思いにひたっているこの私。

大学B 人の世はめでたし朝の 日をうけて すきとほる葉の青きかがやき

【解説】

明治から戦後しばらくも活躍した歌人、佐佐木信綱の短歌。
 朝には、陽光に透ける木の葉の緑が、私の前に輝いている。人の世にあるとは、それだけでなんと祝福されてあることなのか。

公募の部規定

―課題は小2まで。小3から中学生は書写の教科書に載っている課題―

園児・小1 小2

さと

やま

全国硬筆コンクール課題

(年中以下)

ひと	なまえ
----	-----

(年長)

とりのこえ	なまえ
-------	-----

(小1)

ねこのたまは	だいじなかぞ	く	一ねん	なまえ
--------	--------	---	-----	-----

(小2)

とりがなき花	がさくわ	しのすむ町	二年	名前
--------	------	-------	----	----

(小3)

行くかわの流れ	はたえずして	しかも	水にあらず	三年	名前
---------	--------	-----	-------	----	----

(小4)

青い海美しい	山の清らかな川	緑の田畑日本	のたからもの	四年	氏名
--------	---------	--------	--------	----	----

(小5)

子はいく	故きを温めて	新しきを知る	もって師となるべし	五年	氏名
------	--------	--------	-----------	----	----

(小6)

一日に何べんも 友だちや周りの人の「ありがとう」が聞こえる生活。人の心がいつもつながっているようで、温かい気持ちになる。	六年	氏名
--	----	----

(中学)

やはらかに柳あをめる 北上の岸辺目に見ゆ 泣けとごとくに ふるさとの訛なつかし 停車場の人ごみの中に そを聴きにゆく	中・三	氏名
---	-----	----

(高校・大学・一般)

まだあげ初めし前髪の 林檎のもとに見えしとき 前にさしたる花櫛の 花ある君と思ひけり やさしく白き手をのべて 林檎をわれにあたへしは 薄紅の秋の実に 人こひ初めしはじめなり 若菜集より 署名	署名
---	----

【解説】

約800年前に書かれた鎌倉時代初期の随筆「方丈記」(鴨長明)の一節。ものごととはどんなふうり変わっていくが、人の一生も同じだ。

【解説】

今から2500年ほど前の中国の思想家、孔子の言行録をまとめた有名な「論語」の一節で「温故知新」の言葉で知られる。故(ふる)きを温(あた)ためて新しきを知る、というのは、昔の人たちの知恵に学び、そこから新しい知識を導き出すこと。それでこそ人の師となれる、と孔子は説く。故きを温(たず)ねて、との解釈もある。

【解説】

いずれも明治時代の歌人、石川啄木の作。幼年期を浜民村(現在の盛岡市玉山区浜民)で過ごしたが、故郷の美しい自然が心に残したものは大きい。短い生涯に口語を交えた生活詩や三行書きで表す短歌など多くの作品を残した。

【解説】

明治から昭和初期を代表する詩人で小説家、嶋崎藤村の詩集『若菜集』にある「初恋」(4節構成)のうちの第1,2節。七・五調のリズムが美しい。